

堀河百首題「夢」をめぐって

内藤 愛子

堀河百首題の選定意識は総合性、網羅性、基本性が指向され、『和漢朗詠集』の分類と一致率が高く、『和漢朗詠集』との関係の深さは、先学によって、既に指摘されている。¹⁾殊に、『堀河百首』雑の歌題は二十題のうち十三題が『和漢朗詠集』と一致している。だが、一致しない「苔」「河」「野」「関」「橋」「海路」「夢」の七歌題のうち、「河」「野」「関」「橋」「海路」の五歌題は既に述べたように、枕詞が詠み込まれた詠歌が多くみられるという共通の特徴がみられ、歌枕を詠み込むべき条件とした歌題と推察される。それら以外の「苔」「夢」の二歌題がどのような選定意識に拠ったかを探ってみたい。「苔」の歌題に関しては既に取り上げているので、今回は「夢」の歌題を取り上げて、歌題の選定意識を探る手がかりとして、歌題の特質に重点を置いて私見を述べてみたい。

まず、『堀河百首』成立以前に、夢がどのように捉えられ、詠じられていたかを具体的に整理し、検討を加えてみたい。

「夢」という歌題は『堀河百首』成立以前の勅撰集、歌合において歌題としてみえない歌題である。だが、歌材としては『万葉集』以来詠まれている。『万葉集』では夢のほとんどが相聞歌、恋歌の歌材としてみられる。歌題としてみえるのは『分類名家集』や『古今六帖』に

「夢」という分類がなされており、このことは注目に値するだろう。『部類名家集』は藤原兼輔、源公忠、坂上是則、在原元方、藤原興風、清原深養父の六歌集で、そのうち、夢が歌題として残っているのは

『深養父集』43（『私家集大成』中古Ⅰ）の名家集切や『兼輔集』48（『私家集大成』中古Ⅰ）にみられるだけである。いずれも歌題のみ収載され、『深養父集』では、雑の歌題として分類がなされ、『兼輔集』では哀傷の歌題とされている。「夢」が雑・哀傷のいずれの部立分類が正しいのか判明できないが歌題として独立していたことは確かである。

『私家集大成中古Ⅰ』の『兼輔集』の解題（久保木哲夫氏）によれば、『兼輔集』は綿密に部類分けされ、『後撰集』をも参考にしたらしいことを指摘されている。また、『私家集大成中古Ⅰ』の『深養父集』名家集切の解題（片野達郎氏）では、深養父の歌集として最も古いものであろうと推察されている。これらの解題から想像すると、「夢」の歌題分類の相違は伝本の成立過程の相違と捉えられるであろう。

また、『部類名家集』の編集目的は久曾神昇氏『国宝西本願寺三十六人集』によれば、まったく不明であるといながらも素材に注意して分類している点からすれば、当時極めて盛んであった歌合和歌詠作すなわち題詠のために作られたものであるまいか。とご指摘がなされている。このことから、『堀河百首』の歌題設定に際して『部類名家集』を少なからず踏えたと推察することも可能であろう。

『古今六帖』では、第四帖の恋に「夢」の分類がなされ、三十二首が並列されている。そのなかには『万葉集』に収載されている歌が含まれており、夢のうちに愛しい人に逢えるという発想やはかなさやたよ

りなさという心情を表象するものとしての夢が詠じられている歌が多くみられる。

また、漢詩集の部立に拠って分類され、漢詩の語句を題とした大江千里の家集である『句題和歌』（私家集大成中古Ⅰ）23）において、夢が挿入している歌題を抽出してみると、離別、述懐の部立に見出される。離別部には「別後相思夢魂遙」96という歌題がみえ、述懐部では「浮生短於夢」109、「幻世春來夢」112、「夢中歎樂又勝然」116の三題が見出される。

以上のようなことから、勅撰集、歌合には歌題としてみえない「夢」が、小沢正夫氏のご指摘されている中国の部類意識の投影がみられる『部類名家集』や『古今六帖』漢詩集の部立、漢詩句を歌題とした『句題百首』には、分類や歌題として見出される。これが堀河百首題として夢の歌題が選定されるに際して、なんらかの影響関係があったのではないかと考えられるであろう。殊に、前述のように『部類名家集』には、夢という歌題が雑や哀傷に分類されていたことから察すると、『堀河百首』における歌題としての夢は決して新奇な歌題でなく、少なからず、中国の漢詩集の分類意識を踏襲しており、『部類名家集』との関係から歌題選定がなされたと考えられる可能性が見出される。

また、堀河百首題の雑の歌題のうち、前掲のように『和漢朗詠集』との共通一致する歌題は十三題であり、現存する『部類名家集』の断簡と一致する歌題は「松」「苔」「山」「河」「野」「懐旧」の七歌題であるが、恐らく、中国の分類意識がなされている『部類名家集』や『和漢朗詠集』の歌題構成を参考にして堀河百首題の選定がなされたのではないかと推察される。

次に、『堀河百首』成立以前の百首歌において夢がどのように捉えられているかみてみると、『好忠百首』や『順百首』には夢を歌材とした歌がみられるのみであり、夢が独立した歌題として配列されてい

るのは『相模百首』のみである。『相模百首』は、『相模集』29（私家集大成）中古Ⅱ）のなかに、相模と箱根権言の神体とのやりとりという形式をとった三篇の百首歌がおさめられている。その三篇の歌題はおおよそ同じで、四季の部は三部立になっており、その他に、さいはひや命を申、子をねかふ、思、心のうちをあらわす、ゆめ、雑とあり、具体的な歌題がならんでいる。このように雑の歌題とは別に夢が独立した歌題として各々五首詠じられている。

その三篇の五首は次の通りである。

310 いかてとくゆめのしるしをみてしかなかたりつたふるたのしひも
せん

311 まとはするさめするゆめのよなれともうれしきことをみるよしも
かな

312 あさからむゆめのかかりはしきたえのとこのちりともうちはらはら
なむ

313 ぬるたまのうちにあはせしよきことをゆめ／＼かみよちかへさら
なむ

314 いつくしき／＼みがおもかけあらはれてきたかにつくるゆめをみせ
なむ

412 ゆめならばことかたさまにちかへつゝかたりあはせむしるしあら
せむ

413 うれしきは身にあきるまでみちぬらむゆめ心にも思あはせよ

414 あしきことゆめみあはせてしきたへのちりあることをはらふはか
りそ

415 よきことにあらぬことをはゆめはかりみせしとのみもいそかるゝ
かな

416 いまはたゝみにはゝなれぬかけなれはゆめならずともみえされめ
やは

新古今集		千載集		詞花集		金葉集		後拾遺集		拾遺集		後撰集		古今集	
2	春下	1	春上	1	夏	1	秋	2	春上	1	別	1	春中	1	春下
4	秋下	2	夏	2	恋上	3	恋上	3	哀傷	2	恋一	3	夏	1	物名
5	冬	2	冬	1	恋下	4	恋下	2	恋一	6	恋二	3	恋一	5	恋一
8	哀傷	2	羈旅	1	雑下	3	雑下	2	恋二	4	恋三	2	恋二	9	恋二
6	羈旅	3	哀傷					2	恋三	4	恋四	6	恋三	8	恋三
4	恋二	2	恋一					1	恋四	3	雑賀	5	恋四	1	恋四
9	恋三	4	恋二					1	雑一	1	雑恋	2	恋五	3	恋五
5	恋四	2	恋三					1	雑二	3	哀傷	1	雑二	3	哀傷
6	恋五	4	恋四					1	雑三			5	哀傷	3	雑下
4	雑上	1	恋五					1	釈経						
2	雑中	4	雑上												
7	雑下	7	雑中												
2	神祇	1	雑下												
3	釈経	4	釈経												
67		39		5		11		16		24		28		34	

514 うきことをちかふるゆめのみえたらはねてもさめてもうれしと思はむ

515 いさやまたさかしきことのみえぬよにゆめをはいかゝ思とくへき

516 しまったえのちりはゆめにもまさりけりよなくつもるなみたなかれて

517 うきことをいそきもみせはよとゝもにたゝゆめぬしのかみをほかはむ

518 うつゝともゆめともわかす身にそへるかのまほろしとさらはたのまむ

この三篇の作者に關しては諸説があり、百首歌のやりとりという形式で、配列順はおおよそ対応している。夢の五首は、いずれも夢にこの世、この身のはかなさや不安を托して詠しており、殊に、312、414、516の三首は中国詩的世界の影響をうけた閨怨を主題とした夢の歌と捉えられるであろう。このような発想は既に、小野小町の「夢」を対象とした歌群に見出される。⁶⁾

このように、百首歌形式で夢を歌題とした『相模百首』が堀河百首題選定へなんらかの影響を与えたのではないかと想像される。

勅撰集において、歌材として夢がどのように詠まれているか概略的に見てみよう。八代集において、夢という歌材が詠じられている歌を抽出し、各勅撰集の部立ごとに分布を整理し、表にしてみた。

この表のように、八代集において、夢という歌材が詠じられている歌が恋、哀傷、雑の部立に集中的に配列されているという傾向が見出せる。このことは、中国漢詩文の分類意識の影響と受け取れるであろう。こと改めて言うまでもないが勅撰集の恋の部立は恋の情況に応じて部立がなされており、恋の部立のほとんどすべてに分布しているということが知られる。恋の部立には夢のうちで愛しい人に逢うことや『万葉集』の相聞歌以来、恋情を夢に託して歌うことには変わりがないが万葉的恋情とは異なり、夢に現実のはかなさ、たよりなさという心情を託す詩的イメージを表白するものとして使用されている。また、哀傷の部立はなき人に夢で逢うことや人の死に対する悲しみや心情を夢のはかなさに託している。

初歩的だが、現象面からみて特徴的なことを抽出してみると、『後拾遺集』を境にして、雑の部立に配列されている夢を歌材とした詠歌数が、哀傷の部立に配列されている歌数より増加の傾向を示していることや、『後拾遺集』には勅撰集初出の部立である釈経の部立に夢を歌材とした詠歌の分布がみられ、その後、増加する傾向が顕著にみられる。『後拾遺集』は、上野理氏のご指摘されているように、古代から中世への転換期の作品を網羅する勅撰集とされている。前掲のような現象が和歌史の流れにおいて中世化してゆく時期と一致するということとは興味深く思われる。

殊に『千載集』では、雑の部立に配される歌数が恋の部立の歌数より多くの数値を示しており、釈経の部立における歌数の増加している

ということが知られる。具体的にみてみると、哀傷の部立に夢を歌材として詠じた歌のなかに、この世のはかなさを夢にたとえ、無常の情を主題とした花山院御製の歌(550)が見出される。

世のはかなきことを思ひて、詠ませ給うける

550 うつゝとも夢ともえこそ分き果てぬいづれの時をいづれとかせん
また、雑の部立において、夢のはかなさに無常の情や述懐の情を托した詠歌がみられ、雑歌上巻の覺審法師の歌(1025)に「述懐の心を詠める」という詞書きが認められる。その詠歌は重苦しい述懐歌が並列されている歌群の一首である。

1025 過ぎ来にし四十の春の夢の夜は憂きよりほかの思い出でぞなき
雑歌中巻には、無常を主題とした歌群構成がみられ、その中に無常の心を夢に寄託して詠じた歌が五首配列されている。その五首は次のようである。そのうち、1124・1125・1127の三首は百首歌が並置されており、俊成の歌(1124)は堀河百首題を詠じた歌であり、他の三首は『久安百首』の歌題「無常」の詠歌である。

世の常なき事を思ひて詠み侍りける

権僧正永縁

1120 夢とのみこの世のこの見ゆるかな覚むべきほどはいつとなけれ

ど

題知らず

読人しらす

1122 憂きことのまどろむほどは忘れられて醒むれば夢の心地こそすれ

述懐百首歌の中に夢の歌とて詠める

皇太后宮大夫俊成

1124 憂き夢は名残りまでこそ悲しけれこの世の後もなほや歎かん

百首歌奉りける時、無常の心を詠める

藤原季通朝臣

1125 現をも現といかゞ定むべき夢にも夢を見ずはこそあらめ

上西門院の兵衛

1127 これや夢いづれか現はかなさを思ひ分かでも過ぎぬべきかな
このように、八代集では『千載集』において、夢が歌題として初めて認められる。それは、堀河百首題の夢であり、組題百首の歌題として見られるのみである。『新古今集』においても同様な傾向が見出され、『夢』は独立した歌題でなく、堀河百首題の一歌題として定着化してゆくことが知られるだろう。

また、夢という歌材は、単なるはかなさを表白するのみでなく、無常の情や述懐の情を託した観念的な歌語として用いられていると言えるだろう。それは、おそらく、夢という歌材に対して、何らかの価値や発想の転換があったと捉えてよいだろう。

単なる現象面の抽出に滞ざるを得なかったが、これらの考察を踏えて、改に考え直したいと思っている。

次に、『堀河百首』において、夢の歌題をどのように歌人達が捉えていたかを詠歌に即して具体的にいくつかの主題や類型表現のパターンに分けて整理してみたい。

十六首のうち、夢のはかなさやそのはかなさに現実のはかなさを比喩したり、そういう心情を託して詠じた歌が最も多数をしめている。

それらは次のようである。

- 1539 中々に浮世は夢のなかりせはわするゝひまもあらましものを
1542 ね覚つゝこはいかにして嬉しき夢ははかなき物としるゝ
1546 みる人もあるかなきかに成行ははかなき世こそ夢には有けれ
1549 うつゝにもまほろしの世と思ふ身に又夢をさへ何とみるらん
1551 何にかはうつゝのうさもなくさまん夢みる程のなき世也せは

この五首のうち、源頭仲の歌(1542)は夢がはかないものというイメージと同時に、現実がない永遠神秘的な世界であると捉えて、趣向を凝らした歌に仕上げている。1539・1546・1549の三首は「世」に「夜」を掛

け、「夜」は「夢」の縁語である。1539は「浮き」に「憂き」を掛け、1546は「夢」の縁語で「みる」を用い、1549・1551は夢の対立概念として「現」を詠み入れるという今までに使われてきた技巧を用い、いずれも夢にこの世のはかなさを譬えたものと言えよう。そのうち、藤原頭仲の歌(1546)は『古今集』第十六哀傷歌833や『和漢朗詠集』の白居易の詩句を発想の典拠とした詠歌と考えられるだろう。

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみてかの家に遣しける

紀 友則

833 寝ても見ゆ寝ても見えけり大方はうつせみの世を夢にはありける
743 往事少范都似夢 舊遊零落半歸泉 (下巻 懐旧)

この五首のように、夢という歌材はこの世のはかなさという無常観を内包し、観念的な歌語として使われていると言えるだろう。

次の二首の恋愛歌は、現実には逢えないが夢の中で恋しい人に逢うことができるということを主題としており、夢に対する古代的信仰を基とした発想で、少なからず『万葉集』を意識した詠歌と言えるだろう。

1540 わくらはに恋しき人に逢とみる嬉しき夢はさめもあらなん
1545 かなふやと亀のますらにとはゝやな恋しき人を夢にみつるを

この二首は、いずれも夢というものに恋人との相逢いを求め、思いつつ寝ると恋しい人との相逢ということをもとにした発想の歌であろう。

殊に、1545の源師時の歌にみえる「亀のますら」は『万葉集』にみられる歌材であり、恋しい人との相逢いの切願を詠じている。

旅の別れの情や懐旧の情を主題とした詠歌は、藤原公実の歌(1537)と藤原頭季の歌(1541)の二首がみられる。

1537 遠妻は野へのはつ草かりそめの夢のうちにも逢そ嬉しき
1541 うたたねの夢ながりせは別にし昔の人をまたみまじやは

これらは、夢がはかないものという認識の上で、かりそめの夢、うたたねの夢、というようにはかなさをより強調し、夢の中で故郷に残してきた愛しい妻や古人と逢うことが出来ることを詠じ、前掲の

二首と類想とも言えるだろう。また、1537は、序詞や縁詞、掛語などを用いた技巧的な歌に仕上げられている。

漢詩文を発想の典拠とした詠歌が十六首のうち五首掲げられる。

まず、大江匡房(1538)、肥後(1550)の二首は、莊子『齊物論』にある、中国の莊周が胡蝶となった夢をみて、覚めて後、自分が夢で胡蝶になったのか、胡蝶が今、夢の中で自分になっているのか疑ったという「胡蝶の夢」の故事を発想の原典とし、1528はこの世のはかなさを主題とし、1550はその翻訳歌と言えるであろう。

1538百年は花にやとりてすこしてき世はてふの夢にそ有ける

1550花園の胡蝶となるとみし夢はこはまほろしかうつとやせん

藤原仲実の歌(1543)

1543夢にみし人を現にえて後そ世もすなほにはや成にける

は、『史記』第三股本記にみえる、殷の武丁が位につき、殷を復興しようとするが賢人を得ず、三年間政事は皆宰相に委ね、後、夢をみて、その賢人を探ね得て政事が大いに治ったという「武丁の夢」という伝説を典拠として求め、翻訳した詠歌と言える。藤原仲実は『堀河百首』の他の歌題において、漢文学、漢詩文を典拠とした詠法の歌が数多くみられ、仲実の詠法の特徴の一つと言えよう。

永縁の歌(1548)

1548ななき夜の夢の中にてみる夢はいつれうつといかて定めん

は、莊子『齊物論』のなかの「夢中夢レ夢」という詩句を典拠として翻案した歌と言えよう。

河内の歌(1552)

1552はかなしとたれかいひけんさめぬまの夢の中々久しかりけり

は、『列子』第二黄帝や沈既濟『枕中記』にみられる。盧生が邯鄲市上で道士呂翁の枕を借りて眠り、一生の経歴を夢みたという「盧生の夢」という伝説を翻案としている。また、夢のはかなさを前提にしなから構成のおもしろさが認められる。

これら五首のように、漢詩文や中国の伝説、故事等を典拠としているが、いずれの典拠も『堀河百首』成立期には、かなり一般化していたものと想像されるが、このような典拠を漢詩文や中国の伝説、故事に求める詠法は『堀河百首』の夢の歌題の特徴的な詠法の一つであり、そのように漢詩文、中国の伝説、故事に典拠を求め、一首の内容に深みを与えようとする詠法は、本百首における新しい詠法と言えよう。

十六首のなかで、夢の歌題を述懐歌として詠じたのは源俊頼の歌(1544)のみで、特徴的な一首である。夢の歌題以外の歌題においても述懐の情を詠じた歌が多数みられ、そのなかの一首である。

1544さゝかにのいとうかりけん身の程を思へは夢の心地こそすれ

この歌において、「さゝかに」は「いと」にかかる枕詞であり、「いと」は「糸」と副詞としての非常にという意味を掛ける技巧的な歌に仕立て上げている。また、その主題は、蜘蛛の糸のように極めて切れやすくはかないものに卑官なわが身を象徴し、夢にその無常観を表白していると言えよう。

このように『堀河百首』において、夢の歌題の詠歌の特徴は夢という歌材のもつ伝統的な発想、表現構成や修辞などを基にしながら新奇な詠法の創意工夫がみられる。まず、歌材としての夢は、単なる夢のはかなさのイメージを譬えるだけでなく、この世のはかなさという無常感を託す観念的、情趣的な歌材として捉えられていると言えるであろう。それは夢という歌材の価値の転換が少なからずあったと指摘できるであろう。そして、漢詩文の詩句や中国説話や故事を典拠として、歌の広がりをもたせ、内容を深める効果をねらった新しい詠法や述懐歌として詠じたりする、新しい詠作方法上の試みが指摘できる。それは、夢という歌題が勅撰集や歌合に歌題として定着していなかったために様々な発想や表現類形が見出され、詠作方法の模索が成されたことを受け取れるであろう。また、それらは少なからず、堀河百首「夢」の詠歌

の特徴の一つであり、歌題の特質として掲げてよいと思われる。

△注

- (1) 松野陽一氏「組題構成意識の成立と継承」(『文学・語学』第70号 昭49・1)
- (2) 拙稿「堀河百首題「苔」をめぐって」(『文芸論叢』第19号 昭58・3)
- (2) 拙稿「堀河百首題の歌題覚え書」(『文芸論叢』第17号 昭56・3)
- (4) 飯島春敬、久會神昇共著『国宝西本願寺三十六人集』(越後屋書房 昭19)
- (5) 小沢正夫著『古代歌学の形成』第四篇「歌集の編集と和歌の分類」(埴書房 昭38)
- (6) 後藤祥子氏「小野小町試論」(『日本女子大学紀要文学部』27 昭53・3) 山口博氏「小町聞怨」(『中古文学』第22号 昭53・9)
- (7) 使用した本文は次のとおりである。
古今集 朝日古典全書『古今和歌集』、西下経一、滝沢貞夫編『古今集総索引』(明治書院)
後撰集 大阪女子大学編『後撰和歌集総索引』
拾遺集 片桐洋一編『拾遺和歌集の研究 索引篇』(大学堂書房)
後拾遺集 糸井通浩、渡辺輝道編『後拾遺和歌集総索引』(清文堂)
金葉集 増田繁夫他編『金葉和歌集総索引』(清文堂)
詞花集 滝沢貞夫編『詞花集総索引』(明治書院)
千載集 久保田淳、松野陽一校注『千載和歌集』(笠間書院) 滝沢貞夫編『千載集総索引』(笠間書院)
新古今集 滝沢貞夫編『新古今和歌集総索引』(明治書院)
- (8) 上野理著『後拾遺集前後』(笠間書院 昭51)
- (9) 俊頼の歌(1544)の第二句目の「いとわかり」が「いとかかり」となっている伝本がみられる。『新古今集』では「いとかかり」の歌で入集している。もし、「いとかかり」とした場合、「かかり」は「糸」の縁語で「掛かり」を掛けている。橋本不美男、

滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文研究篇』(笠間書院 昭51) 本文参照